

## イワクラ学で解く弥生絵画の謎 田和山幻想 稲吉角田遺跡の土器絵画

理事 江頭 務

### はじめに

イワクラ研究の手法として重要なものに「方位に関係する祭祀」がある。

太陽の冬至・夏至・春分・秋分における日の出・日の入り、特定の山に向かって建てられた社殿、イワクラ群の幾何学的配置等、様々なものがある。本論文では、これを祭祀線と称している。

しかし、歴史の研究において、この祭祀線の検討は看過される場合が多い。

本論文は、太陽と山の祭祀線をもつて稻吉角田遺跡の土器絵画の謎にせまるものである。

稻吉角田遺跡の一連の土器絵画は、一般的には農耕儀礼である銅鐸の祭りを描いたものと推測されていが、この内「木に吊るされた銅鐸」は原画に忠実な見方とは思えない。

本論文は吉野ヶ里遺跡の「夏至と

雲仙岳」の二つの祭祀線との類似性から、絵画に最も適合したことを見出すと共に、絵画が田和山遺跡における鏡の祭具（扶桑樹）を

用いた冬至の太陽祭祀と船通山（鳥の山）の祖靈伝承の山岳祭祀を表しているという新解釈を提起したものである。

もちろん新解釈は十分に証明されたものではないが、既存の弥生

絵画の解釈がすべて仮説の段階である状況においては、新たな仮説としては成り立つであろう。そのため、論文の表題を「田和山幻想」とした。

（注）参考文献は末尾に「著者の五十音順」に掲載した。また、論文中の H.P. はホームページの略で、文献と同様に末尾に「表題の五十音順」に掲載した。

### 1 稲吉角田遺跡出土弥生絵画の従来の解釈

鳥取県米子市にある稻吉角田（いなよしすみた）遺跡（弥生中期）において、絵画が描かれた土器が出土した。その概要を『原始絵画の研究』（設楽 2006）により以下に要約・引用する。

稻吉角田遺跡は、妻木晩田（むきばんだ）遺跡の西方に位置する丘陵の裾近くの扇状地に所在する遺跡である。1980 年の調査において多数の弥生土器が出土し、その中に絵画資料が含まれていた。この土器は、口径約 50 cm、推定高 120 cm 以上の大型壺であり、口縁部から頸部にかけて 6 種類の絵画が描かれている。土器の大ささや他の遺跡の類例からみて、土器自体はおそらくは壺棺として利用されたものと思われるが、正確な出土状況は不明である。土

器の時期は伯耆IV・3期（弥生時代中期後葉）であり、絵画は土器の焼成以前に描かれている。

図1Aのaからfは、この土器に描かれた絵画で、見やすくするために一部補正が施された復元図である。図1Bは、（佐々木1981）に掲載の図1Aに対応する出土原図である。

報告者の佐々木謙によれば、aは鹿であり、bは太陽とされている。cは植物を表現したものであり、おそらくは樹木で柿の実のようなものをつけているとされる。

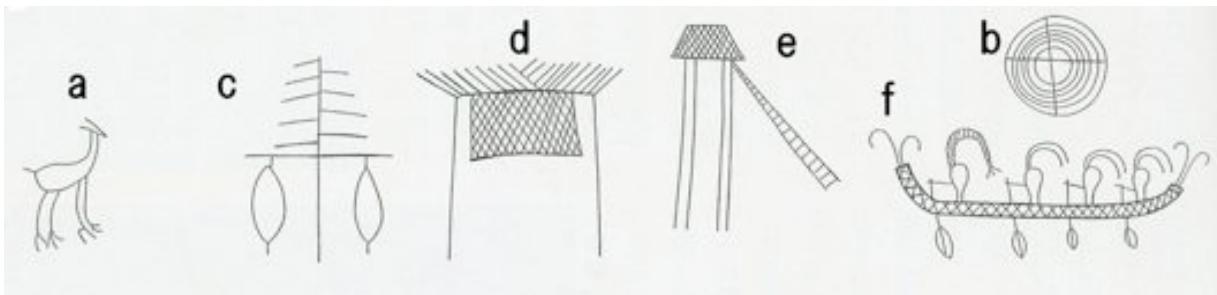


図1A 稲吉角田遺跡出土の弥生式土器に描かれた線刻絵画の復元図（佐原、春成1997）  
a鹿 c樹木？+銅鐸？ d高床式建物 eやぐら状建物 b太陽 f船と人物

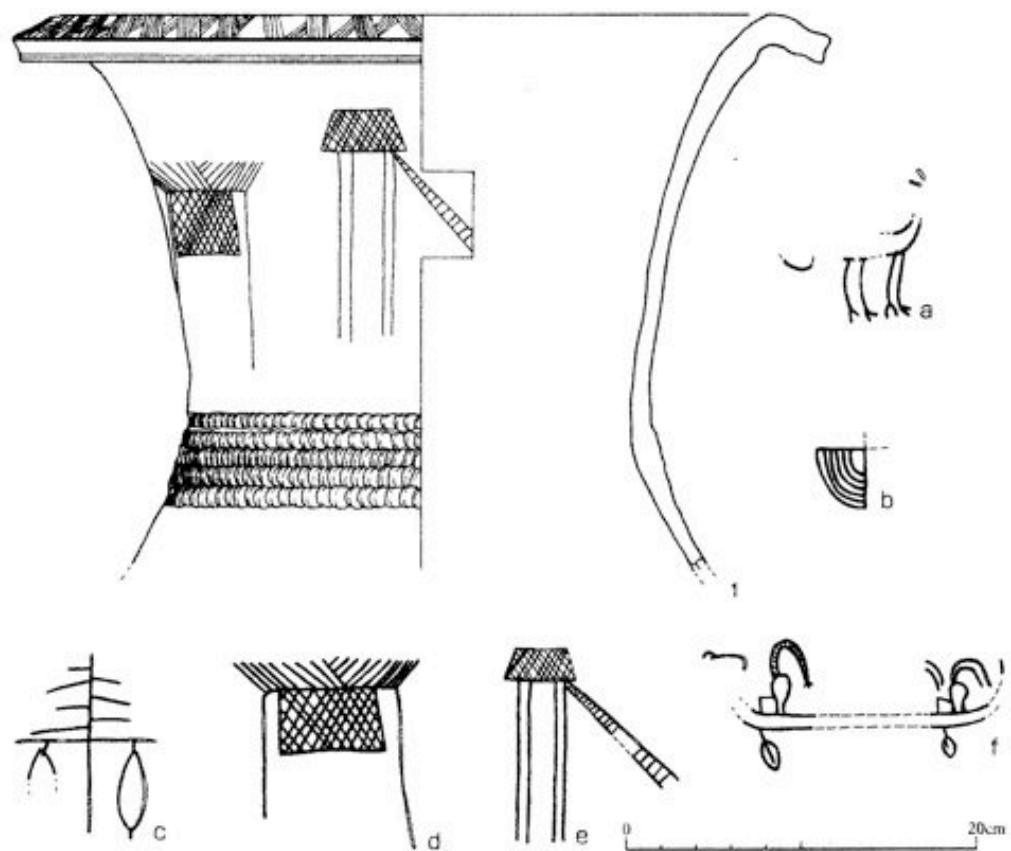


図1B 稲吉角田遺跡出土の弥生式土器に描かれた線刻絵画（出土原図）（設楽2006）

これらの絵画のうち f の舟上の人物の頭部表現については舟印ではなく羽を表現したものであるとし、鳥装の人物が舟に乗っている場面を表現したものとの解釈を提出している。

金閨恕は f の鳥装の漕手と他遺跡出土土器に描かれた鳥装の祭祀担当者との間のモチーフの類似性を指摘し、蘇塗的祭祀（左注参照）との関連を説いている。そして、絵画全体がこの蘇塗的祭場を忠実に写したものであるとして、c を銅鐸が吊るされた樹木と捉え、d と e を祖靈像を納めた神殿とし、f を穀靈を運ぶ舟と解釈した。

（注）蘇塗（ソト） 弥生時代の朝鮮の有様を記した『魏志東夷伝馬韓条』には、大木を竿として立て、それに鈴鼓（朝鮮式小銅鐸）をかけ、神を祀る儀式があつたことが伝えられている。この竿木を「蘇塗」あるいは

「鳥竿（ソツテ）」という。蘇塗の祭りは、竿や木柱を神木に見立て、鳥の羽、白紙、布を結びつけて天神を降ろし、民衆がこれをとりまいて歌い踊るもので、五穀豊穣を祈願する祭りだた。また、朝鮮式小銅鐸は、高さ 4.16 cm の小形で棒状の舌（ぜつ）を有し、日本の銅鐸の原型といわれる。

## 2 従来の解釈の問題点

介であるが、これ以外には、c の銅鐸を太陽祭祀の祭具と考える（千田 1996, 大和 1998）の説がある。変わったところでは、木に吊るされた銅鐸は、死者を籠に入れて人目につかない川上の樹木に吊るして風化させる風葬儀式と見る説（HP 「風葬と稻吉角田遺跡出土土器」）がある。また、稻吉角田遺跡の近くにある妻木晚田遺跡の海を見下ろす山頂（洞ノ原地区）に大型の総柱建物跡が見つかることから、淀江の港の風景を描いたという説もある。（佐古 1999）

その疑問の理由は、図 1 の c における銅鐸を太陽祭祀の祭具と考える。私にはこれが「木に吊るされた銅鐸」にはどうしても見えないからである。これを、自信をもつて「木に吊るされた銅鐸」と言いい切れる人はいないであろう。ならば、「銅鐸の祭り」の解釈も、この絵に関しては成立しがたいと言わざるを得ない。裾のすぼまつた紡錐状の銅鐸などありえないし、その銅鐸を吊るしている樹木の枝も棒のようである。

従つて、「木に吊るされた銅鐸」は農耕儀礼と結びつけるためのいささか強引な解釈と言わざるをえない。

ここで従来解釈の問題点をまとめると次のようになる。

- ① 絵画そのものに忠実に立脚した解釈でない。
- ② 農耕儀礼一辺倒であり、弥生一般的には銅鐸の祭りの風景を描いたものとされ、その銅鐸の祭りは農耕儀礼あつたと推測されている。
- ③ 近畿と山陰の絵画が同質なものとして論じられており、絵画の作者が置かれている個別事情が無

視されている。(例え図柄が似ていても、それが同一の祭祀を表すとは限らないので、個々の検討が必要)

私には稻吉角田遺跡の土器絵画が、弥生の祭祀を単に描いたものではなく、どこかの近在の遺跡の具体的な祭祀を描いたものに思えてならないなかつたのである。本論文は、かかる観点から山陰地方の遺跡と伝承を調査し、稻吉角田遺跡出土の弥生式土器に描かれた線刻絵画が、松江市の田和山遺跡の祭祀をもとに描かれた可能性を述べるものである。

3 田和山環濠集落遺跡の概要と検討

絵画解釈の舞台となる田和山環濠集落遺跡の概要と検討につき、ホームページ「松江市史跡公園」より要点を以下に記載する。

#### 【遺跡の概要】

田和山遺跡は、松江市の中心部から南へ約3kmの乃木平野の東部に独立してある「田和山」と呼ばれる丘陵の北半部に所在し、その面積は約1.6ha余りである。遺跡は、最高所の標高約46mの小高い丘を中心に山麓斜面まで展望し、山頂からは東に茶臼山や大山を、北に松江市街と島根半島を、西北方向に宍道湖を眺望することができる。

遺跡の構成は、(1) 山頂部の建物施設群、(2) 斜面の環濠、(3) 住居跡群の三つのエリアから成る。以下エリア毎に説明する。(図4、15参照)

#### (2) 斜面の環濠

山頂部直下の斜面には三重の環濠がまわる。内側の第一環濠は、まず前期末頃に谷部のみ3カ所に壕が掘られるが、中期後半までに二度ほど掘り直され、支陵部にも掘られて一周する。

真中の第二環濠は、中期後半までに掘られ一周する。外側の第三環濠は、中期後半までに掘られるが、東南部の区間は、両端の底面が上がつており、当初から造られていなかつたものと思われる。

#### 【遺跡の可能性】

て替えの可能性のある高床式倉庫跡1ヶ所(弥生中期後半)、そのすぐ東側に底の浅い6本の柱穴からなる埠跡1列(弥生中期後半)、南北側斜面に一間四方(柱穴5本)の物見やぐら跡と考えられる掘立柱建物跡1軒(弥生前期末～中期後半)がある。南部に三日月形の加工段1ヶ所(弥生前期末)、北部に二段の加工段がある。

#### (3) 住居跡群

住居跡は、環濠の外側斜面にあり、弥生時代中期後半の竪穴式円形住居跡が11軒、同時期の加工段が13ヶ所、ピット群2ヶ所、尾根を削平した段1ヶ所の計27ヶ所がある。北側と西側斜面に偏在しているが、大部分は北側斜面に分布している。

#### 【遺跡の検討】

遺跡は、まず弥生時代前期末頃に第一環濠が造成された。同じ頃、山頂部の物見やぐらも建てられた可能性がある。しかし、環濠は一周するわけではなく、東、北、西の谷部しか造られなかつた。つまり、尾根部には無く、そこから山頂部へは上がれないことはない。壕は聖地と俗界を区別する意味で造られたのかも知れない。

山頂部の他の建物施設も建てられた。そして、環壕外の北側と西側斜面に堅穴住居11軒と加工段13ヶ所や尾根を削平した段などが造られる。後期の土器など遺物は、一片すら確認されなかつたので、中期の終わり頃には機能を停止し、使われなくなつたと考えられる。

弥生時代は、農耕が開始され生活が徐々に安定していった時代だが、一方で収穫物などをめぐつて争いが絶え間なく起つた時代である。そのため、ムラを外敵から守るため、ムラのまわりに環濠を掘つた。それが「環濠集落」と呼ばれる遺跡である。

しかし、田和山遺跡の場合は、環壕の内側には小さな丘があるだけで、しかもその山頂部には堅穴式住居など一つもなく日常的に人が住んでいた形跡がない。小さな倉と物見やぐら、性格不明の無数の柱穴、塀、柵があり、多量の土器に加え銅剣形石剣や土玉も元は山頂部にあつたと思われる。集落跡

は逆に環壕の外側斜面にあり、環壕集落としては極めて特異なあり方を示している。このため三重の環壕は、集落を守るためのものではなく、山頂部そのものを守るために考えたほうがより説明がつきやすい。

周辺の遺跡をみると、弥生時代前期後半から開始されたものが多く、忌部川を中心に広がる乃木平

野を水田に開拓しながら、田和山

遺跡の西と東にある丘陵や低地に居住空間が展開していったことがわかる。大規模な環壕の造成は、このような周辺の複数の集落から人々が動員されて初めて可能となるものであり、山頂部で行われたかも知れない祭祀も複数のムラの共通する信仰に基づくものであろう。

#### 4・1 弥生の太陽祭祀の事例 吉野ヶ里環濠集落遺跡

土器絵画の図1のbを太陽と見るならば、それに対応する祭祀として太陽祭祀が思い浮かぶであろう。実は、邪馬台国の比定地にも挙げられている吉野ヶ里環濠集落遺跡に、夏至の太陽祭祀線が存在することが明らかになつてている。(図2参照)

吉野ヶ里遺跡に北内郭と呼ばれる弥生時代の後期後半から終末期(2~3世紀)の集落の中心部分があり、現在「吉野ヶ里歴史公園」として復元展示されている。北内郭は、図2に示すように夏至の日

田和山遺跡が後期には廃絶しているという事実は、山陰地方の弥生社会の変動期をよく反映している。

北内郭の主祭殿と雲仙普賢岳の方位は、南を基準にして西に8度振

て対称形に作られている。図中の遺跡・中軸線の方位は、南北を基準にして西に6度振れている。北内郭の主祭殿と雲仙普賢岳の方位は、南を基準にして西に8度振

れている。

北内郭に東祭殿と呼ばれる建物があり、写真(図3)と共に次のように紹介されている。(HP「吉野ヶ里歴史公園」)

「東祭殿は、夏至の日の出と冬至の日の入りを結ぶ線上にある高床の建物である。太陽の動きを知るための建物で、ここでは季節ごとの祀りが行われていたと考えられている」

図2 吉野ヶ里遺跡における祭祀の方位線（金関2004）  
 （北内郭の主祭殿と東祭殿の表記は筆者が追記）

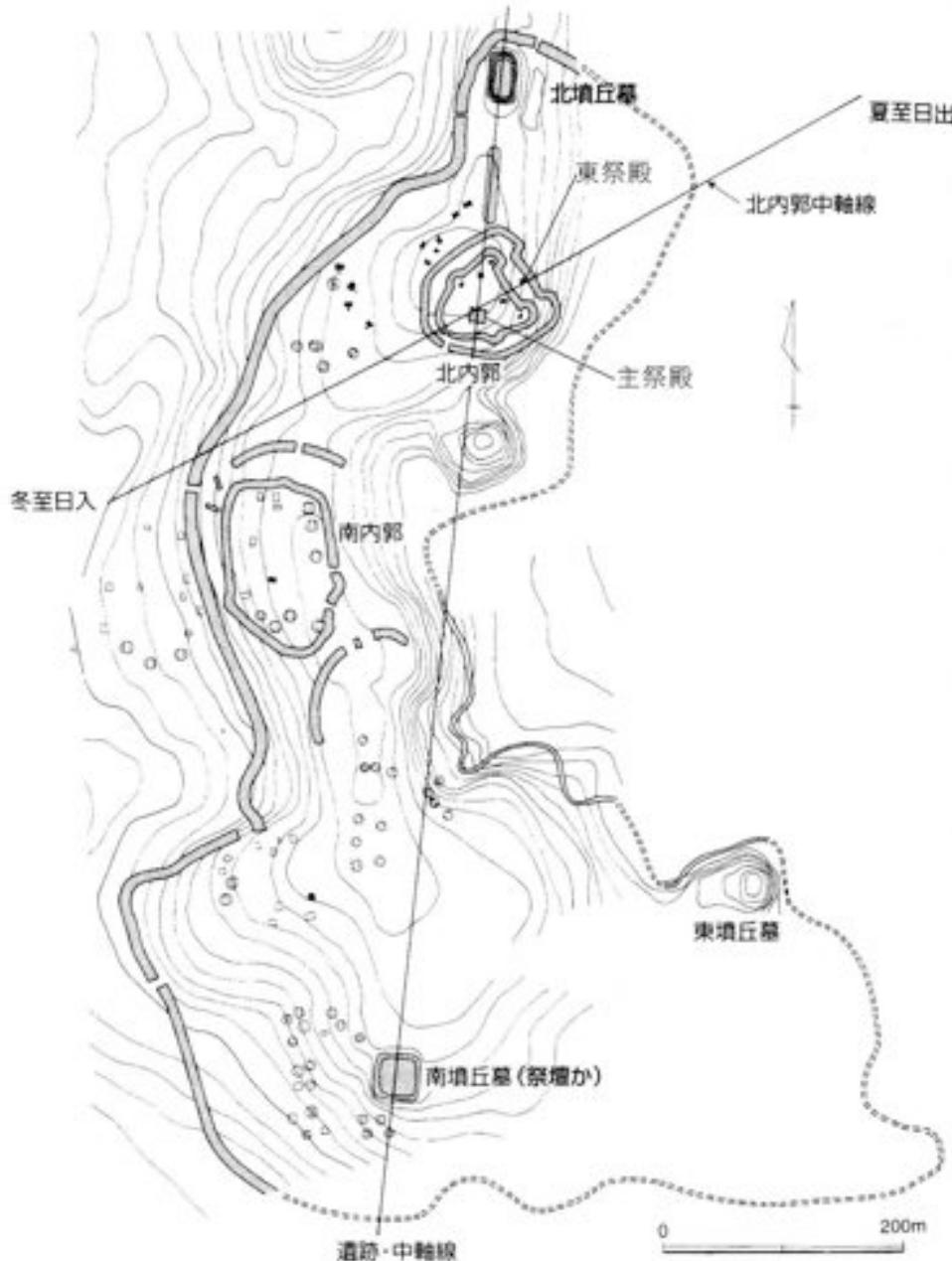


図3 吉野ヶ里遺跡 復元された東祭殿（HP  
 「吉野ヶ里歴史公園」）



4・2 土器絵画の太陽祭祀  
 〈太陽・神庫・鏡の祭具〉

太陽祭祀は縄文時代からある祭祀であり、田和山遺跡においても初期の祭祀と考えられる。そのため、田和山遺跡の弥生時代前期末頃の遺跡地図（図4）を参照する。

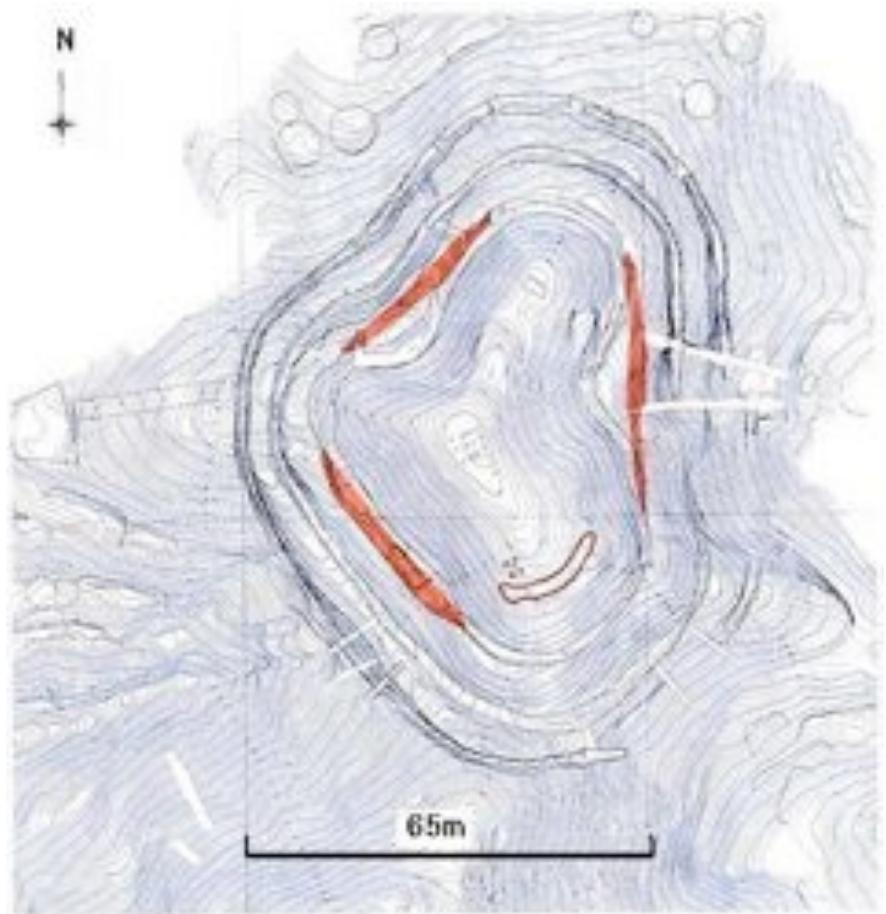


図4

弥生時代前期末頃の田和山遺跡（H.P.「松江市田和山史跡公園」）  
やぐら状建物（弥生前期末～中期後半）、その下にある太線で囲んだエリアは三日月形の加工段（弥生前期末）と呼ばれるもの。  
塗りつぶした部分は環濠、この時期には山頂の高床式建物が建っていないことに注意。

考古学的には、田和山において冬至の日の出方向である南東方向に、吉野ヶ里が夏至なのに、田和山がなぜ冬至なのかを説明する必要があるだろう。

次に、図1の土器絵画cを、冬至の日の出、日の入りの方向に向けて鏡をセットした祭具と考える。イワクラ研究の成果から、冬至の日の出、日の入りは、太陽の祭祀において夏至と同様に極めて重要な方位であることが知られている。ここで、吉野ヶ里が夏至なのに、田和山がなぜ冬至なのかを説明する必要があるだろう。

文献学的には、前漢時代の司馬遷の『史記』の「封禅（ほうぜん）書 第六」に周の時代の太陽祭祀に関する次の記述がある。

山頂部の南にある5本柱が最初に、祭祀施設と考えられる山頂の建物について、表記を次のように統一する。

● 5本のまとまりのある柱穴跡やぐら状建物（弥生前期末～中期後半）

● 9本のまとまりのある柱穴跡  
高床式建物（弥生中期後半）

図4において、やぐら状建物を図1の土器絵画eと考える。そのも

のすばりであろう。

さらに、山頂の南東方向に古い時期（弥生前期後葉～中期前葉）の土器片が多いという傾向も指摘されている。

ホームページ「田和山遺跡鑑定書」は、環濠が南東部において意図的に掘られなかつた可能性があること、居住区が日当たりの良い南側を避けて北側に偏在していることなどから、南東方向に特別な注意が払われたことはほぼ確実と述べている。また、南東側斜面は岩盤の摺理面が露出しており他の斜面には見られない独特の景観であることを指摘している。

「冬の日至に天を南郊に祀り、長日に至るを迎う。夏の日至に地祇を祀る」

このことから、冬至には天（天神）を都の南郊で祀り、夏至には地祇を祀つていたことがわかる。なお、「長日に至る」とは、冬至のあとが長くなつてゆくことである。

ここで、封禪とは、中国の帝王がその政治上の成功を天地に報告するため、山東省の泰山で行つた國家的祭典である。「封」と「禪」は元来別個の由来をもつ祀りであつたと思われるが、山頂での天の祀りを封、山麓での地の祀りを禪と呼び、両者をセットとして封禪の祭典が成立した。（吉川 2007）

以上を整理すると、次のようになる。

〔封〕	山頂（丘）	天神	『文徳実録』齊衡（さいこう）
〔禪〕	山麓（平野）	地祇	3年（856年）11月辛酉条
〔封〕	山頂（丘）	天神	5年（856年）11月壬寅条、延暦6年（787年）11月甲寅条
〔禪〕	山麓（平野）	地祇	3年（856年）11月辛酉条

つまり、冬至と夏至の相違は、祭

場の置かれた地形にあることがわ

かる。吉野ヶ里の祭場（北内郭）

は平野にあり、田和山の祭場は小

高い円丘の上にあることが、夏至

と冬至の違いを生んだものと思わ

れる。

田和山は宍道湖の南にあり、湖岸

の集落からみて南郊に相当する。

我が国においても、河内国交野（か

たの）で、桓武天皇と文徳（もん

とく）天皇が天神の祀り、即ち冬

至の太陽祭祀を行つた記録がある。

（下注参照）

このことは、前述の太陽祭祀が弥生時代から平安初期まで継続して

いたことを示すものである。

（注）『続日本紀』延暦4年（78

5年）11月壬寅条、延暦6年（787年）11月甲寅条

『文徳実録』齊衡（さいこう）

3年（856年）11月辛酉条

ここで、土器絵画（図1c）を鏡を取り付けた祭具と考えるに至った発想の根拠を示そう。

「土器絵画（図1c）の特徴の推定」

①紡錘状の物体は、上下左右対称である。

②二つの紡錘状の物体は、同じ形状で左右対称の位置にある。

③樹木状の物体は直線的に描かれており、樹木のような天然のものでなく、人工物である。

これに、使用される鏡は弥生前

期末に楽浪郡より渡來した多鈕細文鏡と推定する。

（多鈕細文鏡が用いられたとする推定理由）

①弥生前期末に適合する鏡である。

期末に樂浪郡より渡來した多鈕細文鏡と推定する。

（多鈕細文鏡が用いられたとする推定理由）

①弥生前期末に適合する鏡である。

（多鈕細文鏡が用いられたとする推定理由）

①弥生前期末に適合する鏡である。

（多鈕細文鏡が用いられたとする推定理由）

①弥生前期末に適合する鏡である。

（多鈕細文鏡が用いられたとする推定理由）

①弥生前期末に適合する鏡である。

（多鈕細文鏡が用いられたとする推定理由）

①弥生前期末に適合する鏡である。

（多鈕細文鏡が用いられたとする推定理由）

ある。（千田1996）

④鏡の放射線文やジグザク文様（図5参照）は、太陽の象

徴ともいわれ、太陽祭祀にマッチしたデザインである。ま

た、文様は、日の光を受けて

消えたり現れたりもする。

⑤多鈕式の鏡は、鏡の中心に鈕

があるものに比べて祭具等に

固定するのに適している。

さらに、多鈕細文鏡の中で、型式・D式（朝鮮大同郡反川里）（宮里2008）を選定した理由は、以下の通りである。

①弥生前期末に適合する鏡で、

同じ型式が北九州の福岡市吉

武高木三号木棺墓から出土し

ていること。（宮里2008）

吉武高木遺跡は吉野ヶ里遺跡

にも比較的近い。

②鏡に多数の同心円があり、且

つ内区区画が十字文であるこ

とが、土器絵画（図1b）の

太陽に類似していること。

図6に、鏡をセットした祭具の想像図を示す。

祭具は、 $\phi 13\text{ mm}$ の丸棒に $\phi 4\text{ mm}$ の穴を明け、 $\phi 3\text{ mm}$ の紐をこの穴と鏡の二つの鉢穴に通して、鏡を冬至の日の出の方向に固定した。正面(南)から見た左半分(西)は、右側(東)と対称で、鏡は冬至の日の入りに向ける。正面から見た二つの鏡は、長径(上下方向) $134\text{ mm}$ 、短径(東西方向) $67\text{ mm}$ の楕円となる。

図において、判明したことは次のとおりである。

①正面方向から鏡を見たとき、鏡は長径(垂直方向) $134\text{ mm}$ 、短径(水平方向) $67\text{ mm}$ の一対二の楕円となる。

②径 $13\text{ mm}$ 棒のセンターは、鏡の中心軸より、鏡の短径 $67\text{ mm}$ 約六分の一(約 $11\text{ mm}$ )内側による。

図7は土器絵画(図1c)と、正

面から見た二つの鏡を比較したものである。

比較にあたっては、正確を期すため(佐々木1981)の線刻画拓本を原図とした。

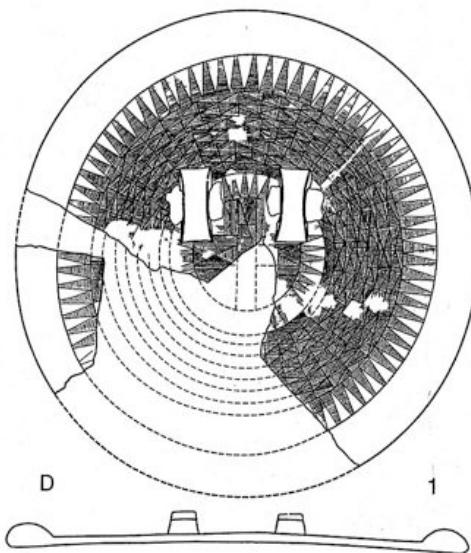
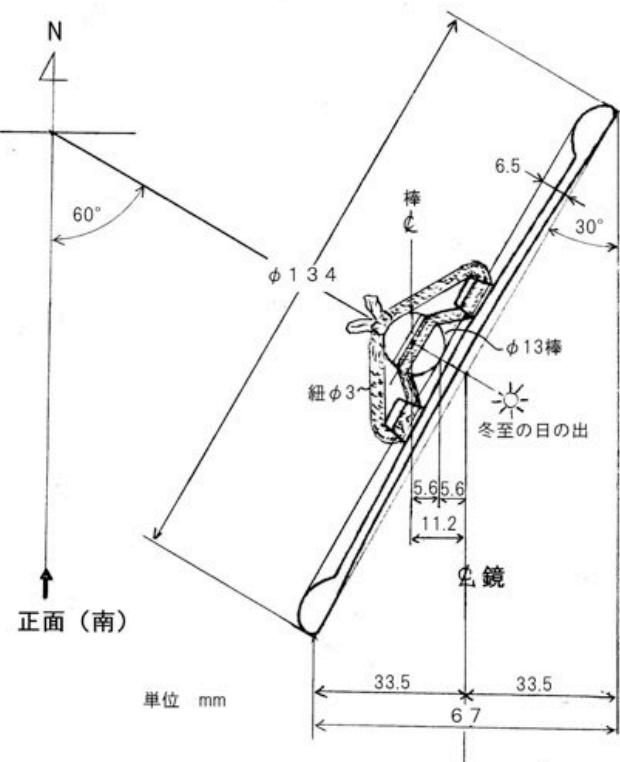


図5 多鉢細文鏡(宮里2008)

多鉢細文鏡 型式:D式 鏡面は凹面  
1926年? 朝鮮平安南道大同郡大宝面反川里的  
桑畑より出土(高橋1924)

内区区画 十字文  
外形  $134\text{ mm}$   
推定計算重量  $350\text{ g}$

図6 丸棒に細文鏡をセットした祭具の想像図(右半分上面図 左右対称)



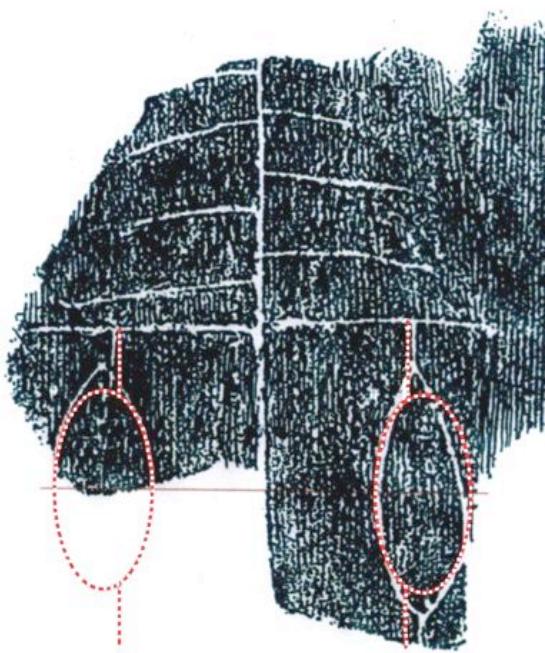


図7 土器絵画（図1c）の拓本と二つの鏡（点線表示）の比較図

- （比較図に関するコメント）
- ①最も線刻しやすいものは直線なので、橈円を彫る場合、技能が未熟であれば直線的要素がどうしても強くなり橈円の上端と下端はレンズ形状になりやすい。
  - ②右と比較すると左の鏡の方が、的確に描かれている。
  - ③鏡の下の棒状のものは、鏡に垂れた房とすればふさわしいであろう。
  - ④樹木状の構造物は、扶桑樹をモチーフにした青銅製の鏡を取り付けるための祭具とすればふさわしいであろう。

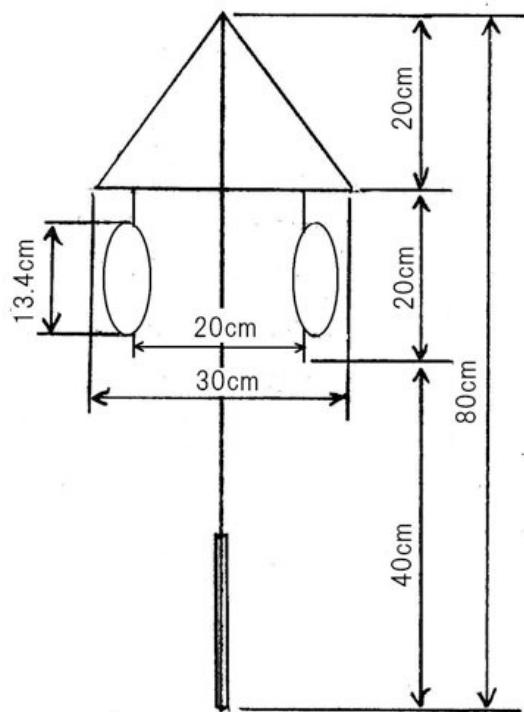


図8 鏡を取り付けた祭具のイメージ

以上のような構想をもとに作成したのが図8の鏡を取り付けた祭具のイメージ図である。

青銅製で重量は4kg、高さは80cm、幅は30cmで、持ち運び可能なものである。

図9は、図8をもとに製作した祭具の模型の写真である。図9を注意深く見ると、遠近法により鏡の前半部（内側部分）が大きく、後半部（外側部分）が小さくなっていることがわかる。このため、視覚的には鏡は正確な橢円でないが、この効果は鏡との距離が離れるに従い減少する。

ヌフオワ  
2001

以上のようないいきょう」には、多数の太陽と扶桑樹に関する次のような神話がある。（多日神話）

私は、これを「扶桑樹（ふそうじゆ）」と見なしたい。

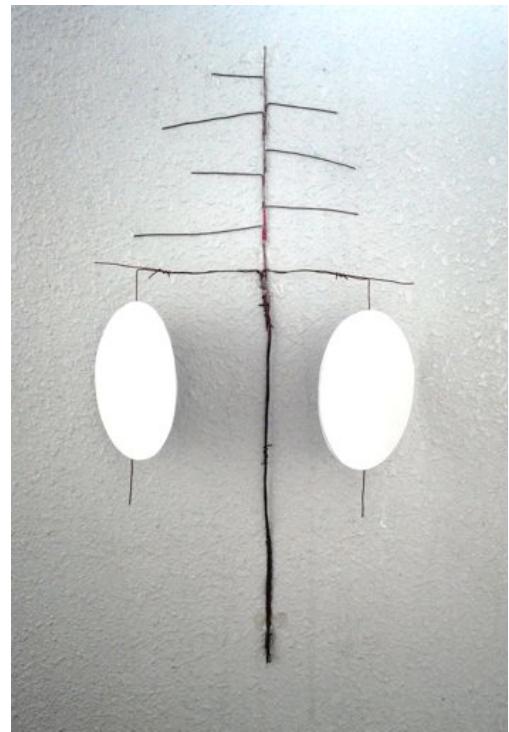


図9 鏡を取り付けた祭具の模型の写真  
青銅製 重量 4kg

ところで、鏡の祭具は何をあらわしたものであろうか。

日の出の時、太陽は扶桑を伝わって登り、日の入りは若木を伝わつて降りるとされる。徐朝龍は、四川省の三星堆（さんせいたい）遺跡から出土した樹木状の「神樹」と呼ばれる巨大な青銅器の研究から、扶桑と若木は同じもので、木としても元々一本であつたと指摘している。

（徐1998、p.129） 本論文はこの説を採用する。

（注）三星堆遺跡 紀元前280

中国から見て、扶桑は東の果て、若木（じやくぼく）は西の果てにある巨木とされる。このため、扶桑は日本国の大名と

(注) 鏡の祭具の支柱からの距離Lにおいて、二つの鏡の中心間の距離の $1/2$ をa、鏡の半径をbとする時、祭具の正面から見た鏡の前半部を基準とする後半部の大きさ（橢円の短径方向長さ比）Rは次式で表される。

$$R = (L - a \cdot \tan 30^\circ - b \cdot \sin 60^\circ) / (L - a \cdot \tan 30^\circ + b \cdot \sin 60^\circ)$$

但し  $L > a \cdot \tan 30^\circ + (a / \tan 30^\circ)$   $a > b \cdot \sin 30^\circ$

ここで、 $a = 200\text{mm}/2 = 100\text{mm}$   $b = 134\text{mm}/2 = 67\text{mm}$  とすると（図8参照）  
 $L = 0.231\text{m}$ （最小値）の時  $R = 0.498$

$L = 1\text{m}$  の時  $R = 0.884$   $L = 2\text{m}$  の時  $R = 0.942$   $L = 3\text{m}$  の時  $R = 0.971$

$L \rightarrow \infty$  の時  $R \rightarrow 1$  となる。

3本見つかっているが、この神樹は1号から3号まで

こでは最大の1号神樹を指す。

1号神樹は、青銅で作られた高さ3.84mの巨大なもので、9本の枝にはカラスと太陽をかたどった果実が実っている。頂部の10本目の枝は欠落したものとされている。

『山海經』の十日神話を形象化したものとして知られ、扶桑樹の源流と言われる。三星堆の初代大王の名は「蚕叢（さんそう）」で蚕が群がる意であり、桑との関係が深い。

いざれにせよ、扶桑樹は太陽が宿る樹であり、太陽信仰の証であることは確かであろう。

扶桑樹の代表事例として、前漢期の馬王堆（まおうたい）一号漢墓出土の帛画（はくが）がある。（図10）

図中の小さな8個の太陽は、筆者

が黒く塗りつぶしたものである。

ここにはカラスが中にいる大きな太陽と、木の枝にぶら下がった8個の小さな太陽がある。

太陽が10個から9個になっているのは三星堆から前漢にかけての変容であろう。

私は、大きな太陽を、図10の反対側の左袖に描かれた月との対応

関係と「太陽を鳥が運ぶ」という神話から天空にあるものと見る。小さな8個の太陽は待機中の太陽であり、それらは日の出のグループと日の入りのグループに大別される。

これを簡略化してゆけば、8個の太陽は日の出と日の入りの2個の太陽に集約され、枝も水平となることがわかる。形状の簡略化は祭具製作上の都合と思われる。

長沙市の東郊で、1972年に発掘された1号墓からは50歳ぐらいの前漢前期の女性の屍体が、葬られたままの姿で見出された。棺

を覆った帛画（絹織物に描いた絵）は、T字形で縦205cm、上幅92cm。

昇仙図を描いたもので、図10の太陽は实物では赤く彩色されている。左袖の部分は、右袖の太陽と対比して三日月とヒキガエルとウサギが描かれている。（曾布川1998）

#### （注）馬王堆一号漢墓 湖南省

即ち、鏡の祭具は、扶桑樹に宿る「昇らんとする太陽（日の出）」と「降りた太陽（日の入り）」を鏡でもつて表象したものと考えられる。



#### 4・3 やぐら状建物と鏡を取り付けた祭具の安置

図11にやぐら状建物の柱穴配

置図を示す。

奇妙なのは1.5m×2.1mの四本柱で囲まれた長方形の狭いエリアの中央に、なお柱が存在することである。この柱は、やぐら状

建物の強度から考えて不要と思われるのでは、私はこれを鏡の祭具を安置するための柱と考えたい。

即ち、やぐら状建屋内部にて、その柱を切り株の如く切断し、その柱の中心に垂直に穴を開ける。そして、その穴に棒状になった図8の祭具の下部を差し込んで固定するのである。こうすることにより、地上から天にそそりたつ巨大な扶

桑樹が完成する。

つまり、祭具は高い樹木の先端部を模擬していることになる。

鏡の祭具は宝物であり、保管には慎重を期したことであろう。土器絵画(図1e)の長大な梯子は、盜難を避けるため普段は集落で管理し、祭具をやぐらから取り出す時のみ用いたのであろう。

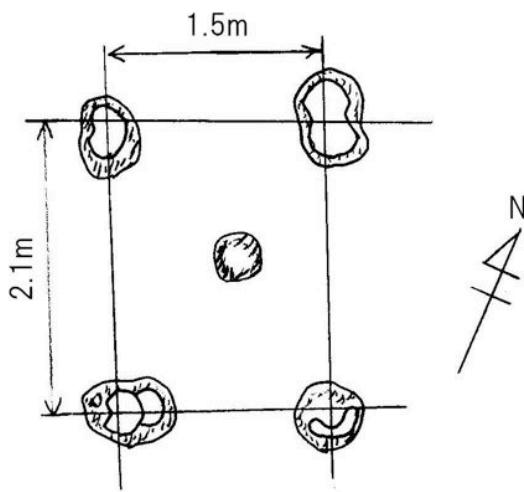


図 11 やぐら状建物(SB-O2)の柱穴配置図

(HP「松江市田和山史跡公園」)

それゆえ、やぐら状建物は物見やぐらではなく、神庫と考えたい。

鏡の祭具は冬至の祭りの日に神庫から地上に降ろされ、祭りに参集した人々に開陳される。

それは、一族の開けゆく未来を示すかのように、朝日や夕日に光り輝いたことであろう。

#### 4・4 田和山遺跡(前期末) の環濠と参道

図4において、環濠は、北部、西部、南東部の尾根において途切られている。

従つて、環濠は防衛的な目的ではなく、祭場の境界を示すものである。

北部、西部の尾根には参道があつたものと推定される。南東部は、祭祀の対象となる冬至の太陽が昇るため参道はない。そして、祭祀的な意味において、鏡の祭具を安

置したやぐら状建物を守護するために、三日月形の浅い環濠が形式的に存在している。

この三日月形の遺構は山頂の南東端を段状に削り出した加工面で、平面形は三日月形を呈し、長さ17m、最大幅2.4mを測る。全体としては段にみえるが、注意深く観察すると、とくに残りのよい東半部では浅い溝状になつていることが知られる。造作当時はもつと明確に溝状を呈していた可能性が高いとある。(HP「田和山遺跡鑑定書」)

冬至の日の出の太陽を拝する場合、山は太陽に向かって西側から登るのが自然である。山の頂上に達した時、正面に太陽が登るからである。

弥生中期後半の田和山遺跡(図15)を見ると、北側に集落があり、西側斜面に祭祀施設と見られる二間×六間の大形掘立建物跡がある。

(H P 「松江市田和山史跡公園」)現在、奥行き約10m、幅・高さ約4mの山陰最大級の掘立柱建物として復元されている。

この大形掘立建物は頂上の聖地に登拝する前に、禊を行うところでこれらから、弥生前期末を想像すると、人々が西の参道を登り頂上で朝日を拝した後、北の参道を下り集落の帰つてゆく様が思い浮かぶ。

## 5 田和山の山岳祭祀

### 5・1 弥生の山岳祭祀の事例

#### 吉野ヶ里環濠集落遺跡

高島忠平は、吉野ヶ里遺跡の集落と山の関係について次のように述べている。(高島2007)  
「吉野ヶ里遺跡の首長の墓域である北墳丘墓と南の祭壇とは約80

0m離れていて、ほぼ南北の線上に並び、さらに南約70kmの延長線上には長崎県の雲仙普賢岳が位置する。(つまりこの時代の「国」の拠点集落を築くにあたっては、広大な空間認識があつたことが判る。柚比本村(ゆびほんむら)遺跡(下注参照)にも、阿蘇山を見通した墳墓と祭祀遺構の配置例がある。

中国で前漢前期から徐々に整えられつつあつた四神(青龍、朱雀、白虎、玄武)による空間認識と信仰が、北部九州の「国」の拠点集落形成に影響を与えていたのではなかとを考えている。弥生人は、火の山を朱雀(左注参照)と見立てていたのかもしれない。その後に見られる漢文化への傾倒はこのことを示している。」

#### (注)柚比本村遺跡

吉野ヶ里遺跡の集落から約14km離れた鳥栖市柚比町に所在。縄文時代晚期から中世にいたる長い期間の遺跡であるが、そ

の中心は弥生時代中期である。掘立柱建物12棟以上、甕棺墓45基のほか、赤色塗彩土器が出土した祭祀遺構も多数検出されている。

「主祭殿は、吉野ヶ里のクニ全体の重要な事柄を決める会議を行つたり、祖先の靈への祈りや祀りを行つたりした、中心的な建物と考えられている」

主祭殿(北内郭の大型高床建物)の実測図(七田、小田1994, p74)より、柱穴群の方位を求めたものが図13である。柱穴の

一つである朱雀は太陽鳥とも言われる南方の神であり、五行説によつて火、赤色と関連付けられている。

8~9度は図13の吉野ヶ里遺跡主祭殿の柱穴の方位であり、主祭殿は雲仙普賢岳に向けて建てられてゐるといつてもよいであろう。

図3の先に、雲仙普賢岳があつたわけである。調べてみると、北内郭中軸線と遺跡中軸線の交差するところにある主祭殿と呼ばれる大型建物は、雲仙普賢岳に向かつて建てられていることがわかつた。また図中の6度の線は、図3の北墳丘墓・北内郭・南墳丘墓を貫く遺跡・中軸線を延長したもので、やはり雲仙普賢岳を指していることがわかる。

尚、雲仙岳は、古くは高来峰（たかくみね）と呼ばれ、『肥前風土記』に山の神 高津来座（たかくつくら）の伝承が残されている。高津来座は、吉野ヶ里の人々の祖神とも想像される。

実は、吉野ヶ里遺跡の主祭殿から雲仙普賢岳の距離は63kmもあり、よほど大気の澄み切った日でないと山の頂は霞んで見えない。

山を祭祀の対象とすることは、我が国でも太古からあり、大場磐雄はこれを浅間型と神奈備型に分類している。浅間型は富士山や赤城山の如く高山や火山の類で遠方からこれを遥拝し、その神靈を畏怖崇敬するものである。尚、浅間は富士山の古名である。神奈備型は、三輪山のように平野に臨む小山で、集落とも接近し、親愛の情を籠めてその恩恵に対して祭るものであるとしている。（大場 1981）両者は、富士山は遠くに、三輪山は近くに、その姿が望めることで共通している。

しかし、雲仙普賢岳は遠く離れた常はほとんど「見えない山」である。このような山岳祭祀は大陸の影響を大きく受けていることから、渡來型の山岳祭祀とでも呼ぶべきものであろう。

これは、弥生集落の発展に伴うテリトリー認識の増大に対応した祭祀空間の拡大ととらえることができるだろう。

里歴史公園（）



図12 復元された主祭殿（HP「吉野ヶ

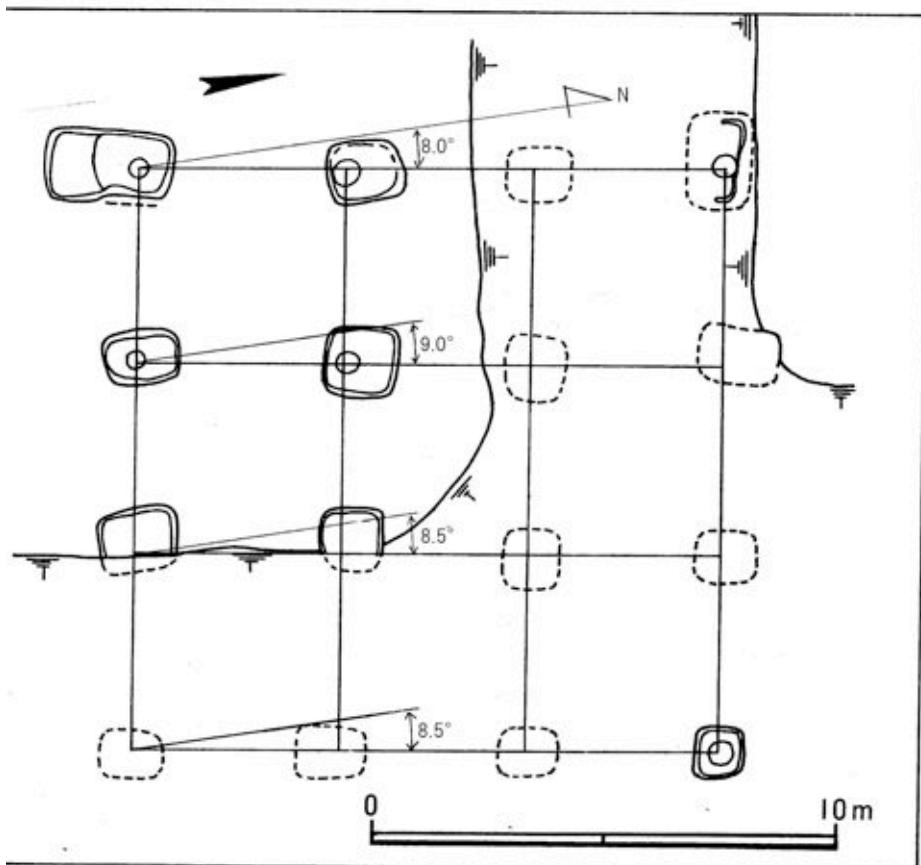
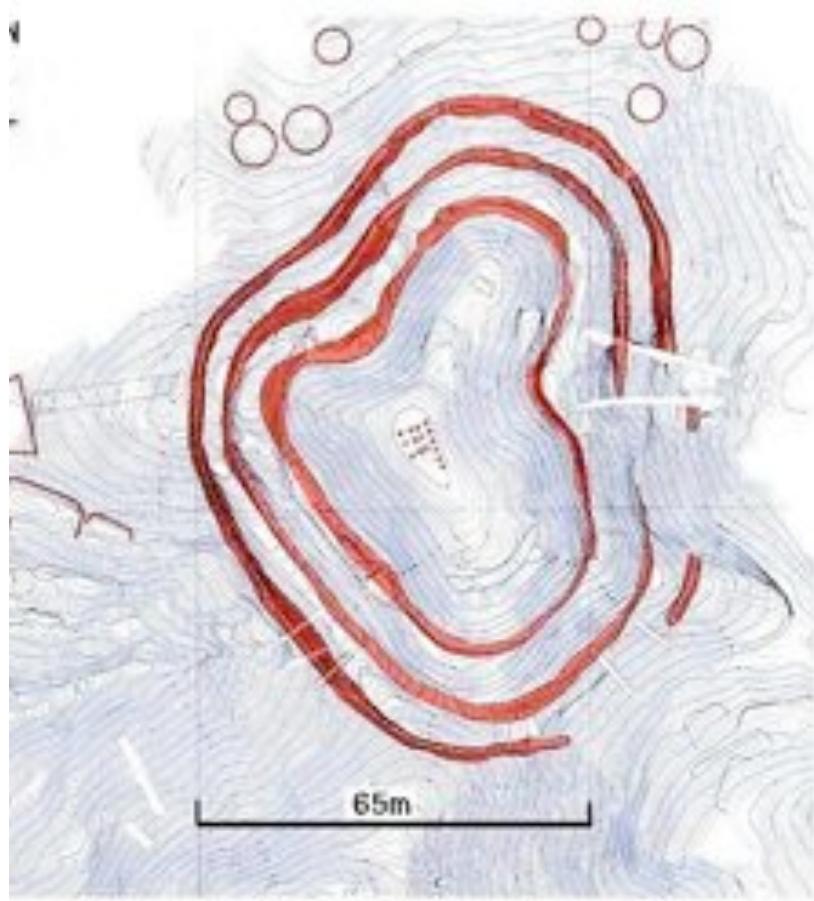


図 1-3 主祭殿（北内郭の大型高床建物）の柱穴遺構（七田・小田 1994, p74）



1-5 弥生時代中期後半頃の田和山遺跡（HP「松江市田和山史跡公園」）

山頂部（標高46m）に田の字の9本の柱穴が、その東に6本の列柱がならぶ。  
南部には、弥生前期末に建てられたやぐら状建物（神庫）がある。

には柱穴の方向を調べればよい。特に、田和山の山頂にはこの建物しかないことから、方向に対し  
る自由度が極めて大きい  
ことに留意すべきである。

図 1-6 の高床式建物の柱穴配置についてホームページ「田和山遺跡鑑定書」から、要点を記載す

5・2 土器絵画の山岳祭祀  
〈天の土舟・遙拝所・鹿〉  
吉野ヶ里遺跡の主祭殿と雲仙岳の関係を、田和山山頂の高床式建物に適用して山岳祭祀の対象となる山を探したところ田和山の南に伝承の山「船通山（せんつうざん）」

最初に、田和山山頂に高床式建物が建てられたとする弥生中期後半の田和山遺跡地図を図 1-5 に示す。

を見出すことができた。

以下、その手順を説明する。

図 1-4 吉野ヶ里遺跡から雲仙普賢岳への方位線（Google Map）  
<吉野ヶ里遺跡主祭殿と雲仙普賢岳の方位の検討>  
吉野ヶ里遺跡主祭殿 北緯33度19分33秒 東経130度23分11秒  
雲仙普賢岳（三角点） 北緯32度45分36秒 東経130度17分32秒  
これから得られた方位は南を基準にして西に7°~8°振れており、吉野ヶ里遺跡と雲仙普賢岳の距離は63kmであった。（図 1-4）



二間×二間総柱で9本柱という考え方のある掘立柱建物SB-101は、弥生時代中期中葉以後葉の段階に属する可能性が高い。柱穴9本のうち北西寄りの3本と中心柱穴の4本は、底面レベルがプラスマイナス5cm以内に揃っており、同時に一つの構造物を支えた柱の

穴であつたことはほぼ確実である。したがつて、この4本で一間×一間の建物を構成していた可能性もある。

本遺跡の最高地点に存在することや、北東に付属するとみられる特異な大形の柵状遮蔽施設もしくは柱列の存在から判断して、特別な性格をもつた建物であった可能性が高い。

上記の記述によれば、柱穴1、2、4、5は、同時に一つの構造物を支えた柱の穴であることは確実である。(図1-6の黒い枠で囲んだエリア) 従つて、南北方向を検討

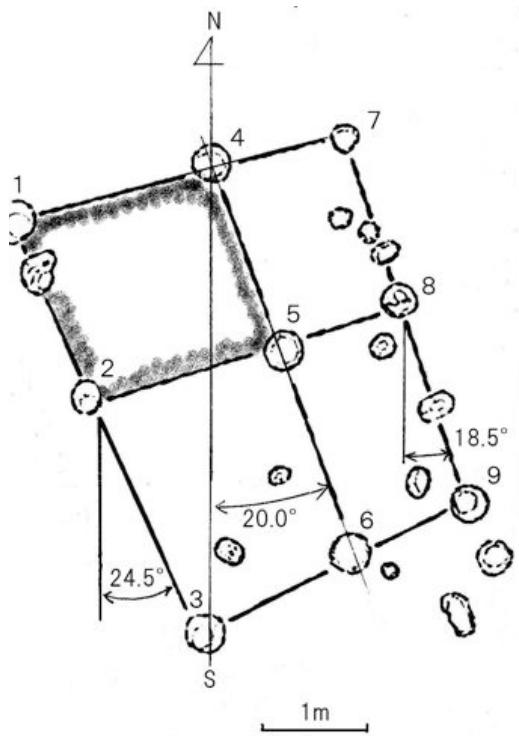
建物の方角を決める場合は、作業の容易な平坦部を基準とすることが予想されることから、

柱穴4—5の方位を図面から測定したところ、南を基準にして東に20度振れていることがわかつた。

(図1)

6) そし  
てその方  
位に伝承

のこと  
がわかつ  
た。



前の山の背後に隠れて田和山からは「見えない山」であり、また南にある山であることから吉野ヶ里遺跡との共通性が見られる。船通山も雲仙普賢岳のように鳥(朱雀・南方)の山として意識されていたのかもしれない。朱雀と南方の結びつきは、五行説が赤を南方の色と定めたことに由来し、四神の信仰は中国の戦国時代に成立し

たとされる。しかし、その古層は、三星堆遺跡の神樹に見られるように、鳥が太陽を運ぶと信じられた頃にさかのぼるのではないだろうか。即ち、太陽の運行は南方がその中心的方位となるからである。

従つて、太陽祭祀と山岳祭祀はまったく別のものではない。古代における鳥と靈魂の密接な関係を思

する場合は、柱穴1—2か柱穴4—5のラインのいずれかを選定する必要がある。

東西方向の地面は尾根の形をしており、断面図から柱穴1—2が柱穴4—5に比較して勾配の大きな斜面にあることが判明した。

尚、柱穴4—5は南を基準にして東に2

4. 5度振れており、その方向に意味のある山はみあたらなかつた。

図1-7 田和山遺跡から船通山への方位線 (Google Map)

〈田和山遺跡高床式建物と船通山の方位の検討〉  
田和山遺跡高床式建物 北緯35度26分18秒 東経133度3分16秒  
船通山(三角点) 北緯35度9分21秒 東経133度10分43秒  
これから得られた方位は南を基準にして東に20度振れており、田和山(標高46m)と  
通山(鳥髪山 標高1143m)の距離は33kmであった。(図1-7)



えば、「鳥の山」の山岳祭祀は鳥を媒介として太陽祭祀から生まれたとも言える。

田和山の山岳祭祀は、祖先の神が出現した伝説の山に対する祖靈信仰と推定される。

それは、太陽祭祀に祖靈信仰を加えることにより、支配者の神聖性と正統性の強化を目指したものであろう。

尚、田和山の墓域として、田和山の北北東250mの位置にある友田遺跡が挙げられる。

友田遺跡（左注参照）は、現在は土地開発のため消滅しているが、弥生中期中葉～後期の墳墓群で、田和山に近いことから、田和山の人々を埋葬した可能性があるとの指摘がある。（H.P「田和山遺跡鑑定書」）

（注）**友田遺跡** 弥生中期の墳丘

墓6基と土擴墓26基。墳

丘墓群と土擴墓群は区別して

いるが、土擴墓群の直上には後期に四隅突出になる

と思われる貼石方形墓が築造されている。これらの墳墓群は宍道湖南東岸の農耕社会における階層分化、政治的支配層の成長を知る上で重要と思われる。遺跡は松江市浜乃木町友田にあつたが、開発事業により消滅。

船通山のこととされる。

『出雲國風土記』には「鳥上山」と記され、出雲國仁多郡家（にたのぐうけ）の南東35里に位置し

たとある。スサノオはヤマタノオロチ（八俣大蛇）退治で知られる

が、その折に尻尾から取出された草那芸の大刀が出現した山ともいわれる。

『伯耆志』はいつ頃から船通山の名が生じたかを不詳とするが、『出雲風土記抄』にはスサノオが

横田町との県境にまたがる標高143mの山。中国山地の主峰の一

つで、古代以来伯耆・出雲の国境をなす。鳥髪山（とりかみやま）、鳥上山とも記され、「とかみやま」とも訓ずる。（徳永1992）

『古事記』天照大神とスサノオ（須佐之男命）段によると、追放さ

れたスサノオは「出雲国の肥の河上、名は鳥髪といふ地」に下つており、鳥髪の地は現在の島根県東部を流れる斐伊（ひい）川上流の

船通山のこととされる。

（注）**イタケル**（五十猛神）は、

日本神話に登場する神。「イ

ソタケル」とも読まれる。

『日本書紀』卷第一第八段一

書第五に登場するが、『古

事記』に登場するオオヤビ

コ（大屋毘古神）と同一神

とされる。スサノオの子で、

オオヤツヒメ（大屋津姫

神）・ツマツヒメ（爪津姫

神）は妹。

『韓神新羅（からかみしらぎ）

神社の社伝』によると、「イタケ

ル・オオヤツヒメ・ツマツヒメの

三神は父神・スサノオ神と一緒に

新羅の国に天降り、そこから埴船

に乗り日本へ帰国するとき、磯竹

村の内大浦の灘なる神島に上陸し、

スサノオ神はこの大浦港に御社を

（そしもり）に天降ったが、スサノオが「この地吾欲さず」と言つたので、一緒に埴船（土でつくつた船）で渡つて出雲斐伊の川上の鳥上峯に至つたとある。

（注）**イタケル**（五十猛神）は、日本神話に登場する神。「イソタケル」とも読まれる。

『日本書紀』卷第一第八段一書第五に登場するが、『古事記』に登場するオオヤビコ（大屋毘古神）と同一神とされる。スサノオの子で、オオヤツヒメ（大屋津姫神）・ツマツヒメ（爪津姫神）は妹。

『韓神新羅（からかみしらぎ）神社の社伝』によると、「イタケル・オオヤツヒメ・ツマツヒメの三神は父神・スサノオ神と一緒に新羅の国に天降り、そこから埴船に乗り日本へ帰国するとき、磯竹村の内大浦の灘なる神島に上陸し、スサノオ神はこの大浦港に御社を

建てたとある。これを継いだかたちで五十猛（いそたけ）神社では、御子イタケル・オオヤツヒメ・ツマツヒメ三柱の神は磯竹村の内なる今の宮山に御社を建て鎮り給い、それより五十猛村と言う」とある。

韓神新羅神社は、島根県太田市五十猛町大浦にある。

ここで、土器絵画（図1f）の神話的な解釈を行えば、船は新羅から船通山に飛来した土船であり、乗っている四人の人物は、先頭がスサノオ、次がスサノオの子供達であるイタケル・オオヤツヒメ・ツマツヒメとなろう。四人の頭部の鳥の羽根は、鳥髪で、天の土舟を強調したものである。図1fの先頭の人物がとりわけ丹念に描かれているのも当然であろう。

（注）春成は、舟の先頭に描かれている人物について、特に入念に描かれていること、次の人物との間隔が開いていることなどから、鳥人の

中でも特別な人物の可能性があると指摘している。（設楽2006 p200）

土器絵画（図1d）は、祖靈の天下った船通山の遥拝所となろう。そして、最後の土器絵画（図1a）

の鹿は、祖靈への託宣や神託を鹿の肩甲骨を使用したト骨によって読み取ることを象徴したものであ

ろう。新羅は356～935年の国であり弥生時代の少し後になるが、これは後世の神話的表現で、出雲の国引き神話と同じく古代朝鮮を指すと考えて良いであろう。

以上の神話から、田和山の人々は朝鮮半島から渡来してきた人々であることが推測される。

## 6. 1 山頂の6本の直線状柱穴

ここで、田和山頂上の拝殿の横の直線状柱穴が何であるかを説明する必要があるだろう。

これは調査・研究が十分でないが、予想される話として、東方に対するデモストレーションを挙げたい。

先の神話から、田和山の人々は西から移動してきた渡来人とすると、東方はこれから進出してゆくところである。

祖先の神話の成立の後、祖靈信仰にもとづく山岳祭祀を行つたため、東方の現地人に對し、6本の杭に祭祀的な意味をもつ旗をくくりつけたのではないだろうか。

祖先の神話の成立の後、祖靈信仰にもとづく山岳祭祀を行つたものと想像できる。

そこで、自らの存在を誇示するため、東方の現地人に對し、6本の杭に祭祀的な意味をもつ旗をくく

りつけたのではないだろうか。

弥生時代の朝鮮には、多くの旗（ヤハタ）を立ててご神体とする習わしがあつた。

ヤハタの語源は、カミの寄りつく

「依代」（ヨリシロ）としての「多くの旗（ハタ・布きれ、ヒレ）」の

意味であり、このハタに神が降りてきて、パタパタとたなびく様子から託宣を告げた古代朝鮮のシャーマンの儀式からきているとする

説が有力である。ヤハタの神は、シャーマンを通じてメッセージを告げる託宣神の特徴を持つているのである。

尚、ヤハタ信仰は、八幡信仰の源流とされている。（H.P「八幡信仰の源流」）

妻木晩田（むきばんだ）遺跡は、弥生時代中期末（1世紀前半）～古墳時代前期（3世紀前半）であり、田和山遺跡（弥生時代前期末～中期後半）と連続していることから、田和山の人々は、後に淀江の妻木晩田に進出した可能性も考えられる。

こう考えれば、妻木晩田遺跡の建物であろう。

近くには稻吉角田遺跡があり、田和山の祭祀を描いた土器が稻吉角田遺跡にあるのも自然ではないだろうか。

やぐら状建物は、異常に高い神殿を持つ古代出雲神殿（図18）の姿にも類似している。

追加すれば9本柱となる。（図19）

9  
大國主が出雲の岬で見た「海を光

図19 5柱配置から9柱配置への拡大（中央が心御柱）

黒色4本が追加の柱穴

従つて、弥生前期末の田和山から広がった可能性のある出雲市下古志町の正蓮寺（じょうれんじ）周辺遺跡の5本柱建物跡は注目に値する。

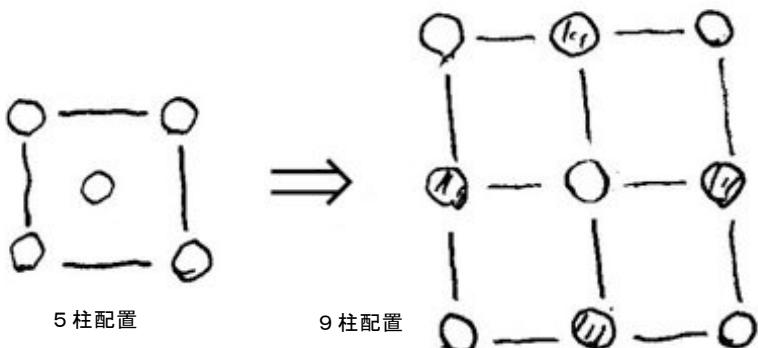
1977年10月17日付けの新聞「山陰中央新報」は、5本柱建物跡に関して、写真とともに要旨次のように報じている。（図20）



図18

古代出雲神殿

（H.P.「出雲の弥生文化」）



5柱配置

9柱配置

して依り来る神」とは、太陽のことではないだろうか。



弥生中・後期の環濠集落跡の発掘が進む正蓮寺周辺遺跡で、同時期の望楼（物見やぐら）か、神殿の可能性がある建物跡が出土した。建物の構造から古代の出雲大社の原型を想定する研究者もあり、貴重な資料として注目される。同遺跡は、出雲平野を流れる神戸（かんど）川の南側の出雲市下古志（しもごし）町に所在する。

見つかった建物跡は、正方形の掘立柱の建物跡で、さいころの5の目のように5本の柱を配置。建物の四隅を支える4つの柱穴はそれぞれ縦、横約1mで四角く、深さは0.5~0.8m、柱の間隔は約2m。さらに中心部には縦1.1m×横1.2m深さ0.9mの柱穴があつ

た。

出土した土器から、弥生中期後半から後期前半のものとみられる。

調査指導に当たった田中義昭・島根大教授（考古学）は「同

遺跡の他の建物跡と比べても、柱穴の規模がひときわ大きくて深いことから、背の高い特殊な建物であることは確か。床が2m四方と狭いことから、やぐらのような建物ではないか」と推測。さらに、中心部の穴の存在から「心の御柱」を持つ古代の出雲大社のような、高さを求める神殿だった可能性を指摘している。

## 7 稲吉角田遺跡と妻木晩田遺跡

妻木晩田遺跡は、弥生中期末～古墳時代前期であり、田和山遺跡（弥生前期末～中期後半）と連続していることから、田和山の人々は、宍道湖湖岸から日本海に面した港を求めて淀江の妻木晩田に進出した可能性も考えられる。

山陰地方における弥生時代の9

本柱掘立柱建物跡の類例としては、

田和山遺跡以外に、陰田第六遺跡

（米子市）、妻木晩田遺跡（淀江

町・大山町）、百塚遺跡群（淀江町）、

下山通南遺跡（溝口町）、柄杓目遺

跡（鹿野町）が知られている。下

山通南遺跡は淀江町の南、柄杓目

遺跡は鳥取市に近い。特に、妻木

晩田遺跡には、13棟もの9本柱掘立柱建物跡が報告されている。

（中尾2001）

中でも、特に注目すべきは洞ノ原SB11の9本柱掘立柱建物跡

（淀江町2000）であろう。

洞ノ原地区は、住居や建物がきわめて希薄な山頂を巨大な環濠で囲んでいることから聖地ではないかと想像され、田和山遺跡との類似が指摘されている。（高田2006,

佐古2003）

南東の方向には巨大なイワクラ

（磐座）がある孝靈山（徳永1992）と『出雲国風土記』に火神

岳と称された大山が一直線に並ぶ。

雲仙普賢岳・阿蘇山・大山はいず

れも南方に聳える火の山・鳥の山

であり、妻木晩田から14km離れた大山を取り込んだ巨大な祭祀

空間の本拠があつた可能性は高い。

妻木晩田遺跡の近くには稻吉角田

遺跡があることから、田和山の祭祀を描いた土器が稻吉角田遺跡にあるのも不自然ではないだろう。

つて、やぐら状建物は祭具を納めた神庫と見なされる。また、祭祀は、古代中国の冬至祭天に類似したものと考えられる。

山岳祭祀は、天の土舟と遥拝所と鹿の三個の絵によって表現されている。

## 8 まとめ へ稻吉角田遺跡出土 土弥生絵画の新解釈

米子市の稻吉角田遺跡の土器絵画は、松江市の田和山遺跡における太陽祭祀と山岳祭祀を描いたものである。

太陽祭祀は、太陽と神庫と鏡の祭具の三個の絵によつて表現されている。

鏡の祭具は、二枚の鏡をそれぞれ冬至の日の出・日の入りに向けたものをセットしたものであり、太陽が宿る前漢期の扶桑樹をモチーフにして作られたものと推定される。この鏡の祭具は、田和山遺跡の山頂の5本柱のやぐら状建物に納められていたと考えられる。從

遥拝所での祭祀の実質は山を媒介とした祖靈祭祀と考えられ、鹿はト骨に用いられたものであろう。太陽祭祀と祖靈祭祀の合体は、支配者の神聖性と正統性の強化を目指したものである。

### 引用・参考文献（五十音順）

イヴ・ボンヌフオワ 2001『世界神話大事典』1113頁 大修館書店

大場磐雄 1981『神道考古学

講座 第一巻』16頁 雄山閣出版

金関恕(ヒロシ) 2004『弥生の習俗と宗教』31—41頁 学生社

佐古和枝 1999「鳥取県妻木晚田遺跡」『邪馬台国時代の国々』23頁 雄山閣出版

佐古和枝 2003「妻木晚田遺跡の理解のための基礎作業」

『考古学に学ぶ(II)』99—100頁 同志社大学考古学シリーズ刊行会

佐々木謙 1981「鳥取県淀江町出土弥生式土器の原始絵画」

『考古学雑誌』 第67巻第1号 95—99頁	12—15頁	『妻木晩田遺跡 洞ノ原地区・晚 建設コソサルタンツ協会	<a href="http://www.yoshinogari.jp/contentss3/?categoryId=10">http://www.yoshinogari.jp/contentss3/?categoryId=10</a>
佐原真、春成秀爾(ヒデジ) 199 7『歴史発掘⑤ 原始絵画』81, 102頁 講談社	37—42頁 同成社	高橋健一 2006『妻木晩田遺 跡 隊る山陰弥生集落の大景観』 設楽博己(シタラ ヒロヒ) 20 06『原始絵画の研究 論考編』1 99—200, 206頁 六一書房	HP : ホームページ (五十音順) 「出雲の弥生文化の源流を訪ね る」 <a href="http://katudohokoku/izumo01/izumo01p/katudohokoku/izumo01/izumo0138—47.html">http://katudohokoku/izumo01/izumo0138—47.html</a>
七田忠昭(シチダ タダアキ)、小 田富士雄 1944 『日本の古代遺跡を掘る 吉野ヶ 里遺跡』74頁 讀売新聞社 徐朝龍(ジョ チョウリュウ) 1 998『三星堆・中国古代文明の 謎』116—163頁 大修館書店	徳永職男 1992『鳥取県の地 名 日本歴史地名体系 32』5 中尾斎 2001「妻木晩田遺跡 における掘立柱建物跡について (1)」 『妻木晩田遺跡発掘調査研究年 報2001』	「田和山遺跡鑑定書(松本武彦)」 <a href="http://www.careguid.co.jp/tawa-i-seki/kantei.htm">http://www.careguid.co.jp/tawa-i-seki/kantei.htm</a> 「八幡信仰の源流」 <a href="http://homepage3.nifty.com/yahoyorodu/hatiman.htm">http://homepage3.nifty.com/yahoyorodu/hatiman.htm</a> 「風葬ヒューム田遺跡出土土器」 <a href="http://www.enjoy.ne.jp/~hisasi/index98-1.html">http://www.enjoy.ne.jp/~hisasi/index98-1.html</a>	田山古墳群発掘調査報告書 本文 編』100, 101頁
千田稔 1996『風景の考古学』 p97—102頁 地人書房 曾布川寛(ヒロシ)、谷豊信 199 8『世界美術大全集 東洋編 第 2巻』108, 137頁 小学館 高島忠平 2007『古代都市吉野ヶ 里遺跡に見る弥生都市』 『Consultant』V01. 273	宮里修 2008「多紐細文鏡の 型式分類と編年」『考古学雑誌』第 92巻 第1号 1—32頁 大和岩雄 1998『神々の考古 学』219—250頁 大和書房 吉川忠夫 2007『世界大百科事 典26』143頁 平凡社 淀江町教育文化事業団 2000	「松江市ホームページ」田和山史 跡公園」 <a href="http://www.city.matsue.shimane.jp/jumin/bunka/bunka/bunkazai/tawayama/">http://www.city.matsue.shimane.jp/jumin/bunka/bunka/bunkazai/tawayama/</a> 「吉野ヶ里歴史公園」	『妻木晩田遺跡 洞ノ原地区・晚 建設コソサルタンツ協会